

失敗も遠回りも、 やがて「点と点」が つながる

茨城県立並木中等教育学校

教諭

わた なべ かず まさ
渡邊 憲優さん

1982年、茨城県生まれ。2002年東京理科大学理工学部数学科に入
学。卒業後は茨城県立高校の教員となる。県立守谷高等学校、県立
水海道第一高等学校で教鞭を執り、同校の附属中学校立ち上げに関
わる。同附属中学の教務主任を3年務めた後、現職。



「学校」は好き。でも「先生」は嫌いだった

渡邊さんは1982年、茨城県下館市（現・筑西市）
生まれ。つくば市で育った。

幼少期はとにかく活動的。自然の中で遊ぶのが好き
で、「家にじっとしてられない子どもだった」と笑
う。勉強も嫌いではなく、小学生の頃から塾に通い、
ピアノやスポーツにも親しんだ。

学校では、クラスを中心にすることも多かったが、
どこか周囲と距離を取っているような子どもでもあっ
た。

「子どもの頃から、“なんで学校ってこうなんだろ
う”とか、“もっとこうしたらいいのに”とか、周り
とは少し違うことを考えてしまうところがあったんで
す」

周囲の子どもたちが無邪気に盛り上がっている様子

“先生に叱られていた子ども”が教員となる

茨城県立並木中等教育学校で数学を教える渡邊憲優
さんは、教員生活21年目を迎える。現在は中学2年
生の副担任をしながら、SSH（スーパーサイエンスハイ
スクール）の企画・運営や、サッカー部の指導にも携
わっている。

「数学も、SSHも、サッカー部も、全部本気です！」
そう語る渡邊さん。熱血教師ぶりが伝わってくる。

しかし、子どものころから「優等生タイプ」だった
わけではない。むしろ自身では、「変り者で扱いにく
く、先生に嫌われる子どもだった」と振り返る。けれ
ど、その“変わった子ども”だった経験こそが、今の
教育観につながっている。



赤ちゃんの頃。母の実家がある茨城県筑西市（旧明野町）にて。



高校1年生の頃。高校の蓼科合宿にて。



大学生時代。住み込みで働いていた新潟県湯沢町のスキー場で、アルバイト仲間と。

を見ながらも、どこか冷めた気持ちで見ている自分がいた。時には周囲とうまくなじめず、つらい思いをしたこともあった。一方で、思ったことをすぐ口に出してしまったり、授業中につい余計な一言を言ってしまったりして、先生によく叱られた。友達と悪ふざけをすることも多く、「先生から見たら、少し手のかかる生徒だったと思います」と苦笑する。

ただ、不思議だったのは、「学校そのもの」は大好きだったことだ。

「学校って、いろいろな個性を持つ人たちが、毎朝一斉に1つの場所に集まり、数時間学んでまた家に帰っていく、すごく不思議なコミュニティだなと思っていました。それ自体が魅力でしたし、自分とは違う人たちと出会えることが楽しかったんです」

人生を変えた、高校時代の担任

転機は高校時代に訪れた。県立高校受験に失敗し、進学したのは私立土浦日本大学高等学校。そこで出会った数学教員が、渡邊さんの人生を大きく変えた。

「その先生だけは、自分を否定しなかったんです」

その担任は、型にはまらない渡邊さんを面白がり、受け入れてくれた。

「その先生自身も少し変わっていて、いわゆる“良い子”であることを生徒に求めなかった。生徒と友達みたいな距離感だったんですよね。いろんな話題に入ってきて、一緒に笑ってくれて。“こういう大人が学校にいていいんだ”と思えたんです」

そこで初めて、「先生っていいな」と思うようになったという。

「学校は社会の縮図。だから、同じタイプの先生ばかりじゃなく、いろいろな先生がいたほうがいい。違うタイプの大人たちと出会う中で学んでいくべきだ」

そう感じて、「自分みたいな変わった先生がいてもいいんじゃないか」と思うようになった。

理科大進学は“恩師の一言”から

高校卒業後は1年間の浪人生活を経験する。昔も今も「根拠のない自信だけはあった」と笑うが、「好き勝手に遊んできた」ことがたたって、思うような結果は出なかった。翌年は、複数の私立大学に合格し、学費面で恵まれた条件をいただいた大学もあった。家庭の負担を考え、進学先には最後まで迷いがあったという。そんな時、背中を押してくれたのが高校時代の恩師だった。

「“高校の数学教員になるなら、絶対に理科大だろ”って言われたんです」

その一言で、進学先を決めた。

理科大で得た「仲間」と「居場所」

東京理科大学では、数学を学びながら、サッカー同好会やアルバイト、旅行など、学生生活を全力で楽しんだ。

塾講師のアルバイトでは、小学生から高校生まで幅広く指導。ここでも「教えること」の面白さを感じていく。

「理科大生って真面目で物静かなイメージがあると思いますが、自分たちは勉強だけでなく、遊びやサークル活動にもかなり熱中していました。柏駅で知らない理科大生から“理科大生ですよ？”と話しかけられたり、ティッシュ配りや居酒屋でアルバイトをしていた理科大生に声を掛けられたりすることもありました。今思えば、少し独特な雰囲気のグループだったのかもしれない(笑)」

仲間と勉強会をしたり、サークルで合宿へ行ったり、



JICAの教師海外研修でガーナを訪問。日本から持参したシャボン玉で現地の子どもたちと交流。



同じくガーナにて。現地の子どもたちや大人とサッカーをした後、ボールをプレゼント



高校教員時代。サッカー部顧問として生徒たちの指導にあたる。



文化祭にて全校生徒の前で漫才を披露。お笑い芸人というかつての夢を実現！

ほしい」と二人で話し、会場の笑いを誘ったようだ。

結果的には、5人の子どもに恵まれ、「今はフットサルチームですね」と笑う。

「今こうして話していることも含めて、自分は本当に理科大に救われてるなと思うんです」

「教員なら、全部できる」

スキー場で住み込みアルバイトをしたり。自由な時間を通して、人とのつながりを深めていった。

人としてどう生きていくかを大学時代に学ぶ

「どんなタイプの人とも、あまり構えずに話せるころはあるかもしれない」と渡邊さん。相手に合わせて自然に会話ができるためか、「気づくと、相手のほうがいろいろ話してくれていることが多い」という。その原点はと尋ねたら、ある人との出会いを教えてくれた。

スキー場のアルバイトで知り合った同級生から、「人生を変える本」をすすめられた。その彼とは今でも交流が続いており、現在は保険の相談などもお願いしているという。すすめられた本を読んだことで、渡邊さんの価値観は大きく変わった。

「それまではあまり本を読むことがありませんでしたが、人はいかに生きるべきかを、私は本から学びました」

以来、興味を持った本を自分でも次々と読むようになり、心に残った言葉や考え方を少しずつ自分の中に取り入れていった。

たとえば、「人がやりたがらないことこそ手を挙げる」「気になったことを見て見ぬふりはしない」「何に対しても誠実に取り組む」など、心に残った言葉を書き留め、自分なりに意識するようになったという。

「それまでは、どこか考え方に偏りがあった気もするのですが、本を読むようになって、物事を少し広く見られるようになった気がします。人との関わり方も含めて、今の自分につながっている部分は大きいですね」

この頃に本から学んだことは、今でも授業の中で折に触れて生徒たちに話しているという。

そして理科大時代には、人生の大きな出会いもあった。現在の奥様とは、理科大で出会ったという。結婚式では、「サッカーチームが作れる11人の子どもが

大学卒業後は、茨城県立高校の数学教員に。守谷高校、水海道第一高校を経て、現在は並木中等教育学校に勤務している。特に印象深かったのは、水海道第一高校附属中学校の立ち上げに携わった経験だ。上司から突然降られた仕事だったが、「失敗したらどうしよう」というよりも「ゼロから学校を作るって、すごく面白そう」という興味のほうが強かった。古い慣習を見直し、新しい学校文化を作る。そこに大きなやりがいを感じたという。

また、教員という仕事には、「いろんなことができる魅力」があると話す。

数学を教える。サッカーを指導する。文化祭でステージに立って笑いを取る。修学旅行を企画する。海外研修のプログラムを作る……。

「本当に何でもできる仕事なんですよ」

高校時代に憧れた「変わった先生」を、自分自身が体現しているようにも見える。

ガーナで知った「幸せ」の価値観

教員になって数年後、渡邊さんはJICA関連の短期派遣でガーナを訪れた。電気の通っていない村にも行き、そこで受けた衝撃は、今も忘れられない。

「ガーナの人に、“日本はあんなに豊かな国なのに、なんで自殺する人が多いんだ”って聞かれたんです」

渡邊さんはその質問に答えることができなかった。その経験以来、「幸せとは何か」を深く考えるようになった。

「日本にいと当たり前だけど、海外に行くと、日本の良さが本当に分かるんですよ。トイレがきれいとか、ご飯がおいしいとか。日本に生まれたというだけで、どれほどありがたいかがわかりました」

だからこそ、生徒たちにも「世界を見てほしい」と伝えている。



生徒の引率として、セブ島海外語学研修へ。現地の先生と。



趣味は登山。谷川岳に登頂したときの写真。



奥様も理科大出身者。5人の子どもに恵まれた。7人家族、全員集合！

「好かれない」は、教員の軸じゃない

渡邊さんは、生徒から「変わった先生」と思われている自覚があるという。授業では、時に雑談を交えながらも、やる時はしっかりやる空気を大切にしている。

「生徒に好かれるか嫌われるかは、自分の中ではあまり重要じゃないんです」

大切なのは、「生徒が成長できるかどうか」。だから時には厳しく指導することもある。

「みんなに成長してほしいという気持ちが一番なんです。好かれようがどうしようがかまわない。生徒の成長を見るのが嬉しい、それだけなんです」

教員のやりがいとは聞いたら、「生徒の成長を間近で見られること」と即座に答えが返ってきた。「生徒と一緒に喜んだり悲しんだりできること。たとえば受験は自分ではできないけれど、生徒が受験をして合格したら一緒に喜べる。それを仕事として経験できる。そんなすばらしい仕事は他にないのではないだろうか」

失敗しても、人生はつながっていく

高校受験では第一志望に落ちた。浪人も経験した。先生に嫌われていたこともある。それでも今、渡邊さんは自分の人生を「悪くなかった」と感じている。

若い頃は目の前のことを一生懸命やってきた。教科指導も生徒指導も部活動も、どれも手を抜かずにやってきた。さらに、「これ、やってみない？」と言われたことは素直に取り組んできた。附属中学校づくりに関わったことも、高校教員から中学教員になったことも、ガーナに研修に行ったことも、SSHの担当になったことも、「やってみない？」と言われたことがきっかけだ。自分にできるだろうか、と考えるよりも「新しいことに挑戦したい」という気持ちのほうが強かった。

そのおかげで、「際立って得意なことがあるわけで

はないですが、いろいろなことをバランスよくやれるようにはなったのかなと思います」という。「失敗もたくさんしました。でも、その時は失敗だと思って、あとで、点と点が全部つながっていくんですよ」

今後も挑戦を続けていく

渡邊さんの、今後の夢を聞いた。

「教員生活も折り返し地点。あと20年をどう生きるかを最近よく考えるようになった」と渡邊さん。

これまでに海外の日本人学校にも2度応募しており、「今後も機会があれば挑戦してみたい」という。

「これまで現場でさまざまな経験をさせてもらったからこそ、今後はまた違った環境や立場から教育に関わることに興味があります」

子どもたちを取り巻く環境や、教員の働く環境について考えることも増えたという。

「これからまだまだ挑戦ですね」

最後に、これから進路を考える高校生にメッセージをいただいた。

「今すぐ完璧な答えを出さなくていい。とにかく、自分が面白いと思うこと、興味のあることに、失敗を恐れず飛び込んでみてほしい。そのときはわからなくても、あとで点と点がつながる瞬間が必ずくると思います」



取材を終えて フリーライター／石井栄子

「私のような平凡な人間で大丈夫でしょうか……」。取材の冒頭の渡邊さんの言葉である。このシリーズ、長く続けているが、同じように言う人はとても多い。でも、本当に“平凡な人生”だった人は一人もない。渡邊さんも同じ。チャンスがあれば躊躇せずつかむ。その時は点だった経験がやがて線となり渡邊さん独自の人生を形作っていく。点はまだ増え続けている。この先、また違う人生の展開を見せてくれそうだ。